

# 竹の山狂詩曲

ラプソディー

## 『バトンの逆襲』

外国語学部英米語学科教授

梅垣昌子

### 序奏

目を閉じてふかく深く息を吸い込むと、胸の奥深くチクリとはじける痛みがある。記憶の肺胞のかすかな叫び。その針穴ほどの小さな隙間からは、なにか懐かしく緩やかな温かいものがジワリと溶け出し、四肢のすみずみまで心地よく沁みわたっていく。

言葉の網目からこぼれ落ちる星砂の思いを、豪快で繊細な魔術師の手さばきで見事に掬い上げてみせる、世界のマエストロたち。その燦然と輝くひと振りが紡ぎ出す、圧倒的な音とリズムは、期待に胸を高ぶらせる聴衆の心にめくるめく感情の虹を投影する。

幸せな陶酔のひとつとき。胸の奥の痛みをゆっくり解きほぐす七色の幸福感が、慌ただしい日常の谷間によく訪れてくる。その名づけえぬ感覚の新芽に惜しめない光を注いでいるのは、胸の奥深くで響きはじめて至高のシンフォニー。

### 第一楽章 プレスト・マ・ノン・トロツポ

カタカタカタカタ、イタイタ痛っ。合同祭での初演奏とか。緊張はわかるけど、楽屋代わりの階段の踊り場で、手すりに打ちつけるのは止めてほしい。もつともこういう扱い、よくあるけどね。例えばサー・ジョン。バルビローリ。一九五六年のハレ管弦楽団のリハ。若干シワがれた声で「パリラツパ・パリラツパ」言いながら、台でカンカン叩いて弦に指示出した。サー・トマス・ビーチヤムの方は、楽団員の頭をチョンチョン。ちゃんと本来の扱いをしてほしい。本来といえばずっと昔の十七世紀、ワレラの先代は拍子とりの重い杖だった。床にトントン打ちつけられる。一度フランスの礼拝堂で、リユリの足に噛み付いたとか。振られる棒になったワレラの時代が来てから、約二世紀。初めベルリオーズのところをいたときは、白い皮で巻いた鯨の骨という格好。メンデルスゾーンのところでは、太い菩提樹の枝に身をやつした。ニキシュやブルーノの頃はまだ長かったな。今はラッキョウ型の握りをつけた白塗りの短いプラスチックの棒。身軽になったもんだ。だが存在感はすごいぞ。ワレラは大宇宙に響き渡る音楽の神のメッセージを受信するヒライシンなのだ。もはや単なる拍子とりの道具ではないぞ。そこところ、この先生は、圧倒的に力不足というほかないな。

「右手は音楽をいわば線で描き、左手は色彩を与える。そうやって楽団員の「潜在力を解き放ち、放射させ、魔法をかける」。その右手にしかとつかまれているのが、ワレラさ。これ、シャルルの受け売りだけだね。デュトワじゃなくてミュンシユの方ね。あえて指先だけで一〇〇人を操るマエストロもいるけど。オザワやストコフスキーには「エア・ワレラ」ね。最初はこの先生も、デフォルトでその方式だったんだ。でもある日、楽譜係の学生が気をきかせた。眺めのいいK館の楽器室で眠っていたワレラの覚醒。「先生、これ、使ってください」。床と平行に凛々しくすつと差し出してくれた。

カタカタカタカタ。この人はなぜか毎日、切羽詰まってるらしい。キーボードを叩いてはギーギー印刷。合間にユーチューブ見ながらヤンソンスを真似て振ってくれる……のはいいけど、学生は違うぞ。ウィーン・フィルではないぞ。高校時代のチェロのエースもいれば、ピオラの初心者もいる。しっかり者のバイオリンもいれば、バイトが忙しい金管木管もいる。「ダルセーニョばっかだ。どう弾くの?」「ジーピーって? 全員静まれっつてか?」「先生、私たちに合わせるんじゃないやなくて。先生が指揮者なんだから、私たちが合わせますっ」とか。箸にも棒にもかからない素人指揮者は大変だね。「振ると面食らう」ってフルトヴェングラーが言われてたのは、もちろん冗談だぞ。登場するだけで楽団の音を変えてしまうほどのカリスマなんだ、彼は。学生を相手に「振ると信頼なくす」みたいな指揮者は最悪だぞ。そんなことじゃ、教員でもいられないぞ。昨日はほぼ徹夜で総譜を復習してたのが泣けるけど、例によってまた気づくのが遅いな。でも今日はその甲斐あつてか、今までの中では一番ましだ。指揮台前の慣れないお辞儀はぎこちなかったけど、「美しく青きドナウ」は無事終了。いよいよ次は「ラデツキー行進曲」。昨日のリハで確認したよね。行進曲だけ演奏会用だから、ゆっくりりめにね。でないとなんか大変なことになるぞ。頼むぞ。ワレラの切っ先が、七号館カフェテリアの天井を指す。最初のひと振り、ふた振り……。スネアドラムの彼女が表情を変えずに内心ひきつる。速っ。言わんこっちゃない。もう呆れた。飛び出してやる!

## 第二楽章 アンダンテ・カンタービレ

十月末に行われた大学の合同祭でのコンサートから、一か月あまりが経過した。ごく内輪のサマーコンサートで指揮を担当していた学生が、諸事情により合同祭では振れなくなったというので、ピンチヒッターのつも

りで指揮を引き受けた。顧問になったばかりの責任感も多少あった。しかしながら、学生オーケストラの指揮というのは想像以上に大変な仕事だ。素人が片手間にできることでは到底ない。当日は無我夢中だったのだろう。あろうことか演奏の最中に指揮棒を飛ばしてしまった。大きく弧を描いて観客席の手前に落ち、怪我人が出なかったのは不幸中の幸いだった。外国語大学らしく国際色豊かな聴衆から、「オー、バトン!」という声が漏れたのを思い出すたび冷や汗をかく。学生たちのためにもっと準備周到にやればよかったと、今になって後悔の念がチクリと胸を突き刺す。「わるいオーケストラがあるのではなくて、ただわるい指揮者がいるだけだ」。ハンス・フォン・ビューローの言葉が、出来ない教員には針になる。

今日は中西学園創立七十周年記念の式典だ。その祝賀会で、オーケストラの団員の学生たちが弦楽四重奏を披露する。会場は名古屋栄のガーデン・パレス。今回は指揮者不要のため、安心して聴衆のひとりになれる。とはいえ目的地に向かってゆっくり歩く道すがら、遠くの看板にホテルの頭文字のロゴが見えてくると、それが頭の中で「ゲネラル・パウゼ」に自動変換されてしまうことにすぐ気づき、ワレながら苦笑する。「指揮者であることは、死ぬことによってしか快癒することができない病気なのです」。シャルル・ミュンシュの言葉がほんの少し、理解できたような錯覚を楽しむ。

祝賀会もたけなわ、聴くたびに成長を感じる学生たちの演奏に触れると、ジワリと温かいものがこみあげてくる。合わせる楽しさのとりこになった学生たちには、次のステージが待っている。本業にもどった教員にとっては、指揮者の極意を教室で再認識する日々が待っている。「練習で指揮台に立つと、三十秒ほど全員の顔を見ることにしています。楽員は、それほど指揮者を見ていないようできて、見ているんですよ。一度みんなの顔を見ておくと、楽員は自分がずっと見られていると思う。「本当は、指揮者が何もしなくてもうまくいくというのが理想です。初めと終

わりぐらいは振って」。朝比奈隆の残した言葉が、身に沁みる。教室の指揮者たる教員の理想形は、まだずつと先だ。

参考文献

シャルル・ミュンシュ『指揮者という仕事』福田達夫訳（春秋社、一九九四年）  
朝比奈隆『指揮者の仕事』（実業之日本社、二〇〇二年）

### 第三楽章 アレグロ・コン・ブリオ

「みなさま、本日は寒風ふきさぶ中、名古屋外国語大学フィルハーモニー管弦楽団の第一回定期演奏会にお越しいただきまして、本当にありがとうございます。結成から約一年、さまざまな紆余曲折や苦労を経て、本日二月十四日、初めての定期演奏会にたどり着きました。ご支援をいただきました先生方、職員の方々、そして創設から見守り助けてくださった学生課のみなさまに深く感謝を申し上げます。

この夏に学生が知多半島で合宿をしたとき、練習を見に行きました。手探りの合奏の指針となっていたのは、メトロノームのカチカチカチカチという金属音でした。秋の合同祭に向けては、顧問が指揮台で拍子を取ることになりましたが、何かが大きく欠けている。そんなとき、管楽器のトレーナーの先生が来てくださいました。それに次いで、本日タクトを振ってくださいった弦楽器の先生が、本楽団の音楽監督に就任されたのです。まさにバトン・タッチの完了です。新しい指揮者をお迎えして、舞台上に半円形に並んだ学生たちのアーチに、まさに楔（キーストーン）石がカチリとはまりました。学生たちの音はみるみる変化をとげて豊かな色彩を放ち、その光が輝きを増してまいりました。

まだ立ち上がったばかりの新米の楽団ですが、今後とも学生たちの成長を見守って下さいますよう、どうか、どうかよろしくお願いいたします。来年もまた、みなさまのご来場を心よりお待ちしております。』

（うめがき まよこ）